

絶やしてはならない —緒方洪庵—

幕末、大阪を中心に活躍した一人の蘭学者がいた。緒方洪庵である。

洪庵は、文化七年（一八一〇年）、備中の国（今の岡山県）足守藩士の三男として生まれた。十六歳の時、父が蔵屋敷の留守居役に任ぜられたのに従って、大阪で生活を始める。ほどなく洪庵は、西洋医学を専門にする蘭学者の中天游に出会い、蘭方医になる決心をした。

天游のもとで熱心に勉強し、翻訳書を読み尽くすと、天游から原書を読んで勉強をするように勧められ、江戸の坪井信道の塾に入門した。そこでオランダ語の原書を数十巻読み込んだ。苦勞と努力の末に身に付けたオランダ語の力量は、信道の師の宇田川榛齋に認められ、榛齋の著書に書いてある薬の分量について、日本の人々に分かるように日蘭の換算表をつけてもらいたいと頼まれるほどであった。江戸にいる間にいくつかの医学書を翻訳した洪庵は、学者として名をあげていく。

その後、洪庵は長崎に蘭学修行に出掛ける。

江戸時代、人々から恐れられていた病気の一つが、人から人へとうつる天然痘で、毎年のように流行し、多くの人が命を失った。たとえ命をとりとめても顔に天然痘の痕が残ったり失明したりする者もあった。その頃医師たちは天然痘に一度かかると二度と発病しないことに気付き、人工的に軽い天然痘にかからせることを考えついていた。しかし、天然痘にかかった人の膿を、腕に傷を付けて接種する人痘種痘法は、それがもとで本当に天然痘になつてしまうこともあり、危険を伴うものだった。

長崎から足守に戻った洪庵は、五歳の甥と二歳の姪に天然痘予防のための人痘種痘を行った。ところが、二人の腕は腫れ、発熱してしまった。幸い甥と姪の熱は下がり、ことなきを得たが、命を第一に考える洪庵

は、危険を伴う人痘種痘法を村の子どもたちへ施すことはできなかった。

西洋の医学書を読んでいた洪庵は、ジェンナー^{*}の牛痘種痘法を知っていた。牛痘種痘法は、乳牛を飼う人が牛痘にかかると、その後二度と人の天然痘にかからないという発見から開発されたもので、ヨーロッパでは安全性と有効性が認められていた。洪庵は、牛痘苗^{びゅうびょう}が日本に入ってくるのを今か今かと待ち続けた。

嘉永二年（一八四九年）、洪庵三十九歳の時、ついに、牛痘種痘に成功したとの知らせが京都の日野鼎哉^{ていさい}から届いた。かねて福井藩の笠原良策^{かさはらりょうさく}が、京都の鼎哉を通じ依頼していた痘苗が長崎から届き、種痘に成功したという。

「天然痘予防の痘苗が京都に来たぞ。」

日頃の洪庵らしくない上ずった声で、弟子の日野葛民^{かつみん}に告げると、大和屋喜兵衛の家に向かった。これで、天然痘にかかって命をなくす者がなくなるのだと思うと洪庵の足はひとりでに速くなった。

「洪庵先生、種痘を接種する場所は私が用意いたします。」

喜兵衛は蘭学者洪庵の良き理解者であり支援者であった。喜兵衛はすぐに近所の隠居所を借りて「除痘館」開設の準備を進めた。

これを見届け、洪庵と葛民は急ぎ京都に向かった。

「長い年月、待ち続けてきました。子どもたちを救ってやりたいのです。痘苗を分けていただけませんか。」

丁寧^{ていねい}に頼む洪庵をじつと見つめ、良策はしばらくして口を開いた。

「実は、この痘苗は福井藩御用のものなのです……。ですが、命を救いたいという思いは誰でも同じです。痘苗を絶やさないためにお分けします。」

「ありがとうございます。ついては、私どもは種痘のやり方が未熟です。ぜひ実地に教えていただきたいの

です。」

十一月七日、霜の降りた寒い朝、大阪の洪庵のもとに、良策と鼎哉が淀川を船で下ってきた。洪庵と仲間の医師たちは除痘館にうちそろって出迎えた。連れてきた一人の子どもの腕から、一人の子どもに痘苗を植えつなぐ儀式が厳かに行われた。そしてまた次の子どもにも。順々に八人の子どもにも苗を植えつないだ。

四日目に、良策と鼎哉は、子どもの腕を見ると、頬をゆるませた。

「大丈夫です。種痘は成功です。」

「よし、これで多くの命が救われる。」

洪庵とその仲間の医師たちは、希望に胸をふくらませた。ここに大阪での種痘の第一歩が始まった。

除痘館の種痘日は七日目ごとと決められた。

初めのうちは種痘に来る者があったが、間もなくぱたつと途絶えた。どうしたのかと調べてみると、種痘をすると牛になる、子どもに害があるとの風評が広がっていた。人々に効能の説明をしても、いったん立った風評を覆すことは並大抵のことではなく、町の人々は耳をかさなかった。

漢方が支配していたこの頃は、西洋医学を理解する人は少数で、漢方医から、牛痘種痘法に反対する書物も出て、人命を救うために始めた種痘事業は、世間の無知と反対勢力の誹謗中傷にさらされた。しかし、洪庵は諦めなかった。洪庵は、門弟に指示して、種痘をする子どもを探させた。

「このままでは、痘苗が絶えてしまう。」

洪庵は、自腹を切つて金を出し、米や菓子と引き替えにしてまでも子どもに種痘をしていった。

「種痘によって、必ず命が救われるのだ。だから、一日に一人でもいい。痘苗を絶やしてはならない。」

洪庵の切なる願いが浸透するには時間がかかった。

しかし、毎年のように流行する天然痘に、種痘をした子どもはかからないという実績が目の前に表れてき

て、町の人々は変わり始めた。

「先生、これで、子どもたちは救われます。」

門弟の言葉に、洪庵は目を細めてうなずいた。洪庵の前を「種痘済み」の証明書を持つ親子連れが次々と通っていった。

* * *

洪庵の設立した適塾は、日本の蘭学のメッカとなり、慶應義塾を創立した福沢諭吉、初代内務省衛生局長として近代医学の基礎を築いた長与専齋^{ながよせんさい}、日本赤十字社を創設した佐野常民^{つねたみ}等々、多くの人材を輩出した。

※注 ジェンナー：一七九六年、八歳の少年に牛痘を接種

し、天然痘予防に成功したイギリスの医師。

